

講師の体験談がもとになっている絵本『いのちをいたたく』（文・内田美智子／絵・諸江和美／出版・西日本新聞社）の朗読（2年生5人）で始まったこの講座は、自分や周りの人々の命や食について学び、大切にしたいと開いたもので、演題は、『いのち・生きることを考える』でした。

「両親も同じ食肉解体の仕事で、汚れて、臭く、怪我も多い家業が嫌いで、この仕事だけはしたくないと思っていた」と坂本さんは開口。

そう心していた自身がその仕事に就くまでの道のりから、「やはり向いてない。辞めたい」と悩むも、思い直すきっかけとなった体験を切々と語り掛けます。

それが長男の授業参観にまつわる話や、センターに運ばれてきた1頭のみいちゃん（牛）と女の子と出合いのエピソード。「女の子の言動で気持ちよさそうにしているみいちゃんの顔、そして最後の涙を見るまでは、仕事の前に牛に話し掛けることも、撫でることもなく、しなくていいと思っていた。肉になる動物と割り切り、かわいそうと思ったこともなかった」と話し、「この子（動物）たちに苦しみや痛みを一時でも与えず、楽に天国に送ってあげることが俺の仕事なんだ」と、長男が発した「心ない人がしたら苦しむ：」の意味や仕事へのやりがい、気が付かれます。



■命をいただく意味を語る坂本さん

命をいただく動物たちの代わりに
楽しいこと、嬉しいこと、
いっぱい感じて！

多久市思春期の今
「いのち・生きることを考える講座」

市と中央中は1月24日、熊本市食肉加工センター職員の坂本義喜さんを講師に招いて、『思春期の今「いのち・生きることを考える講座」を中央中で開きました。絵本化もされた講師の食肉解体という仕事を通じた実話に、全校生徒と保護者ら500人以上が熱心に耳を傾けました。

「生きる力」を育む教育研究を発表

多久市教育委員会から研究委嘱を受けた小中学校教諭の発表会が2月12日、市役所で行われ、市内の教職員や教育委員など約40人が参加しました。研究成果を教職員が共有し、実践で生かし、子どもたちの「生きる力」を育むことが目的で、1年目の研究経過を3人、2年目の研究経過を5人の教諭が発表。掲げた目標に照らし、実践成果、課題

などがまとめられ、研究を通じた学校教育の責務や役割とともに、それぞれの学校や一人ひとりの教職員が克服すべき教育課題に対しても、真摯に取り組み、自分たちが生きている姿が伺える発表でした。

その中で、緑が丘小全体での取り組み「多久の五賢人」の教材化は、地域の発展に尽くした先人の考え方や生き方を学び、自分たちが生きる今日の社会に生



▲前列右から研究成果を発表の遠藤浩幸教諭（東部小）、山崎浩子教諭（西溪中）、佐藤友美教諭（緑が丘小代表者）、坂村隆教諭（西部小）古館大輔教諭（浜崎小・元北部小）。後列右から研究経過を発表の渡辺明美教諭（東部中代表者）、岩崎達義教諭（納所小）、秋次裕輔教諭（納所小）

かそうとする態度や郷土をよりよい町にしていこうとする資質や能力を育てるため、次年度からは7小学校で共有化される貴重な研究となりました。

定例教育委員会のお知らせ

2月10日に定例教育委員会を開き、多久市文化財保護審議会から、東多町北坊区の「百万遍念仏塔」、北多町久松ヶ浦区の「弁財天石祠」、多久町東の原区・専称寺所蔵の「青銅製雲版」を多久市重要文化財に指定するよう意見の申し立てがあった件を協議し、承認しました。

次回、3月12日（金）の13時30分から第3委員会室（市役所2階）で開催します。傍聴は自由です。

■問い合わせ 教育委員会 教育統括室 ☎75-3450